

客観的現在と心身相関の同時性

青山拓央（千葉大学）

1

誰かと時間をともにしていても、その人物の表情や声が私のもとに届くには、わずかな時間の遅れが生じる。光や音の伝達にわずかな時間を要するためだ。ある作家はこれを嘆き、われわれは現在という時を他者と共有できないのだと記した。

科学的な知見に従うなら、こうした時間の遅れは個人の内部でも成立し得る。私の腕に針が刺さり、私がそのことに気がつくには、皮膚から神経伝達物質が脳に届くのを待たねばならない。さらに皮膚からの感覚刺激が、他の刺激と組み合わせられて処理される時間が必要だろう。身体に関する私の知覚は、物理的身体の変化に対してつねに遅れているのである。

意識の現象的側面についてこの遅れを考察するなら、われわれにはなにがいえるだろうか。信号の伝達や脳内の情報処理といった物理的過程の探求が終わり、意識状態と対応する最終的な物理状態が明らかにされたとしよう。ではその物理状態がある意識状態を「生み出す」（この表現については次節で論じる）のに、更なる時間は不要なのか。

ここで私は奇妙な可能性に思い至る。私の物理状態が、それに対応する意識状態を生み出すために、途方もなく長い年月、たとえば1万年もの時間を要するとしたらどうだろうか。もしそれが現実发生过っていたとしても、私はなにも気付かないのではないだろうか。

物理主義的な因果への見方が、この可能性の前提にはある。物理的世界のなかで因果連鎖が閉じているなら、意識は一種の余剰であり、物質に作用することはない。天敵に出会った生物は、一連の物理的過程を経て危険を回避するだろう。この物理的過程自体に1万年もの時間を要するなら、その生物はまったくまともではない。危険回避の実行以前に、その生物は既に死んでいる。だが意識の生成については、このような問題は生じない。天敵に出会った一万年後に、恐怖の意識が生じることは十分に想像可能である。

2

この奇妙な可能性は、物質が意識を生み出すという想定に起因するものであろう。「生み出す」という表現は、因果的な理解をわれわれに促す。だが因果の物理的閉鎖性を厳密に支持するなら、

意識から物質へと向かう因果作用だけではなく、物質から意識へと向かう因果作用もまた不可能となるはずなのだ。すなわち前節の議論は、前者の因果作用のみを退け、後者を受け容れているようにみえる。

ではこの不徹底を戒め、心身の相互作用（意識－物質間の因果作用）を完全に否定してみよう。このとき意識と物質との最終的な関係は、因果的な含意をもたないさまざまな言葉（随伴、スーパーヴィーン、同一といった）で表現される。「生み出す」という表現を消し去ることで、前節の奇妙な可能性は、一見退けられたようにみえる。対応する意識と物質とは、同時に存在するように思われるのだ。

だがこの解決は本物ではない。問題を比喩的に整理しておこう。物質は大地に位置し、互いに因果的な関連をもつ。一方、意識は空に舞う凧であり、それぞれの意識は対応する物質と一本の糸で繋がっている。いまわれわれが行っていたのは、この糸を非因果的なものとみなすことで、その時間的長さをゼロにしてしまおうという試みであった。しかしその試みは、実際には容易なものではない。

いわゆる随伴現象説において、意識と物質との時間的距離をゼロとみなすのは、信念の表明であって説明ではない。そもそも、ここで想定されている「随伴」の意味は謎であり、ただその一方向的な関係（物理状態が意識状態を決定するのであり、その逆ではない）が「随伴」と呼ばれているに過ぎない。さてもしこのような関係が心身の間にある得たとして、なぜ両者は時間的に同時である必要があるのか。単に決定性が重要であるなら、意識は物質に遅れるどころか、先立つことさえあり得るだろう。あるいは心身は始めから、比較不可能な時間に属していることさえあり得る。

スーパーヴィーン関係を用いた心身関係の説明は、過去の随伴現象説に比べ、はるかに論理的に精密ではある。だがこの「スーパーヴィーン」という凧糸がどれだけの時間的な長さをもつかは、やはり未決定なままである。スーパーヴィーン関係とは一般に、タイプ間に見出されるものであり、この関係からトークン間の時間的距離が直接決定されることはない。

慎重な考察が必要なのは、同一性を用いた説明である。心身をつなぐ凧糸を「同一性」とみなすことは、結局、凧が物質とトークン同一的であることを意味する。さてこのとき、凧と物質が同時に存在することはまったく自明ではないだろうか。

だが問題は、心身の同一性がいかにして確保されるのかである。通常物質同士については、時空的位置の一致から対象のトークン同一性を導くのは、充分説得的である（これをトークン同一性の定義にすることさえ自然だろう）。だが心身に関してはこの推論は逆向きに働き、さらに要請のかたちを取る。すなわち「同一である心身は、時空的に同位置であるべき」だというように。しかしこの要請が妥当となるには、心身の同一性を時空的位置の一致に頼らず、確保できるので

なければならない（そうでなければ循環となる）。にもかかわらず一方では、そこで確保された同一性が、時空的な位置の一致を含意する証拠も必要となるⁱⁱ。この課題は極めて困難であり、私は寡聞にして成功例を知らない。

この課題の困難さを直観的に理解するには、意識の空間的位置について考えてみるのがよいだろう。物質が空間的位置と時間的位置をもつものに対し、意識は時間的位置のみをもつようにみえることはデカルトの時代から気付かれていた。意識の空間的位置というのは謎めいた概念であり、トークン同一性の主張からそれが要請されたとしても、われわれはそれがどのようなものかを直接経験することはできない。このとき興味深いのは、心身のトークン同一性もまた、直接的な経験によって知られるものではないという点だ。それゆえ上述した課題は、経験不可能な前提から経験不可能な結論を取り出す、過度に形而上学的なものとなる。

3

冒頭でみた作家の嘆きは、他者から私へと伝わってくる情報の遅れに向けられていた。だがわれわれはいまや、それとは比べ物にならないほどの嘆きの可能性に直面している。あなたの目の前の人物がさまざまな感情をあらわにしても、その感情が当人にとって現象的に捉えられるのはあなたの死んだ後かもしれない。その人物にとっての現在は、あなたにとっての現在から、数万年隔たっているかもしれないのだ。

他者の意識と自分の意識が同時に存在していることは、二重の意味で確認できない。第一に他者の意識は、私の意識についてと同様、それが捉えている対象と同時に存在する保証がない。それゆえ他者と私の意識が同一の対象を捉えていても、そのことは二つの意識の同時性の証拠とはならない。そして第二に、他我問題の特殊なバージョンとして、他者の現在の意識は私の現在の意識のなかに現れてくることがない。そのため私は、自分にとっての現在が他者にとっての現在と同時であるかを知ることができない。

ここで『哲学的考察』におけるウィトゲンシュタインの比喩が思い出される——。「ここで話されている現在とは、映写機のレンズの位置に丁度今あるフィルムの帯の像のことではない、——この像はそれの前後にあり既にそれ以前にレンズの位置にあったかあるいはまだレンズの位置に来ていないその他の像と対比される。そうではなく今問題となっているのはスクリーン上の像であり、それは不当にも現在と呼ばれているのである」（Wittgenstein 1971, 邦訳 p.100）

この比喩を私は次のように語りなおしたい。あるフィルムがスクリーンに映し出されているという事実は、まさしく現在の事実である。そしてこの事実そのものは、フィルムのどこにも刻まれていない。だが公共的な視点からチェックすることが可能なのは、フィルムの内容だけなので

ある——。現在という概念が、こうした私私的な私たちでしか意味づけられないのだとするなら、私と他者との現在は比較不可能となるだろう（そもそも他者の現在というのは、矛盾した概念となるかもしれない）。

4

心身の因果的な相互作用を認める素朴なかたちの二元論（以下、素朴二元論）は、すっかり信頼性を失っている。ある哲学の入門書には、「もはや誰もそれを信じていない」とまで書かれるほどだ。だが注目すべきことに、われわれの目下の問題に解決を与えてくれるのは、この素朴二元論なのである。

次のようなケースを考えてみよう。私の頭に火の粉がかかり、私は猛烈な熱さを感じる。私は火を消そうと考え、慌てて両手で火の粉を払う。このとき私の感覚や意志が、私の身体運動を惹き起こしているのだと考えると、心身の時間関係はどのようなものとみなされるべきか。

常識的な前提に従い、逆向き因果（結果が原因に先んじる因果）を回避するなら、心身の時間的關係はかなり限られたものとなる。先程の消火の例でいうなら、頭に火の粉がかかるのは消火の意志をもつ以前でなければならないし、消火の意志をもつのは両手で火の粉を払う以前でなければならない。意識とそれに対応する物質は、複数の相互作用に挟み込まれることによって、ほぼ同時とみなし得るほど近い時間的位置関係をもつことになる。

以上の議論を人間一般に適用するなら、われわれは物質の時間的位置を通して、お互いの意識の同時性を確保することができるかもしれない。あなたがあなたの意識の力で私にコーヒーを手渡し、私が私の意識の力でそれを口に運んだなら、われわれはコーヒーの時間的位置を通して、お互いの意識の同時性を確認する望みが得られるのだ。

もしこの望みが本物なら、時間論の中心問題の一つに光を投げかけることができるだろう。すなわちそれは前節でもみた、現在の客観性の問題である。私は常にある世界を現在として受け止めているが、その世界が現在であることの根拠は世界の内部には現れていない。それは現在与えられている、というまさにその事実のみによって、現在としての意味をもつのだ。

心身の相互作用については、物理主義的な立場からもそれを説明する試みがある。だがそれらは上述した素朴二元論とは異なるものだ。私には彼らの試みの多くが、実際には因果作用をもたない心に関して因果的な語りが有効であるのはなぜかを説明するものであるようにみえる。だが本稿の問題を解決するには、こうした語りが有効であるだけでは足りない。心身相関の同時性や他者との現在の共有を事実として保証するためには、心身の相互作用が実際に可能であることが求められるのだ。

私は以上の論証に、見落としがあるような気がしてならない。素朴二元論は周知の通り、多くの欠陥を抱えており、私もまたそれを心から信じていることができないからだ。だがもし素朴二元論のほかに、本稿の問題への解決策がどこにも見出せないのだとするなら、それは皮肉な状況をもたらす。というのも、心身の一元化をはかる物理主義が心身の時間的結合に苦しむのに対して、心身の分離をみとめる素朴二元論は、容易にその結合を果たすからだ。

本稿の議論を経たことで、私は次のようにさえ感じる。素朴二元論による心身の分離は、むしろ心身の時間的な一元化を果たすものではないのかと。さらに強調すべきことは、この心身の一元化が、自他の時間の一元化さえも促すようにみえることだ。仮にこれが事実であれば、素朴二元論は常識心理学を単に焼き直したものではなく、常識心理学をも包み込むような、時間への常識的直観を擁護するものとなるだろう。

注

i 仮にこの立場を推し進めるなら、次の問いに向き合う必要がある。意識の属する時間には、あらゆる生物のすべての意識が比較可能なかたちで属しているのか？ もし比較不可能であることを根拠に、物理的時間と意識の時間とを分割すべきだと考えるのなら、私の意識とあなたの意識も独立の時間をもってしかるべきであろう。こうした議論は結局のところ、時間的な独我論へと導かれるようにみえる。

ii 時空的位置の一致に基づく対象の個別化の主張は、心身のトークン同一説と原理的には独立している。実際、トークン同一説を提唱した当時のデイヴィドソンは、同一性の基準に因果関係（それも時間性とは無関係に導入された原始概念としての「惹き起こし」）の同型性を利用しており、時空的位置の一致は必ずしも要求されない (Davidson 1969, 1970)。

参考文献

1. Davidson, D. 1969, "The Individuation of Events," in Davidson 1980, pp.163-80
2. ——— 1970, "Mental Events," in Davidson 1980, pp.207-25
3. ——— 1980, *Essays on Actions and Events*, Oxford: Clarendon Press. (『行為と出来事』服部・柴田訳, 勁草書房, 1990)
4. Wittgenstein, L. 1971, *Philosophische Bemerkungen*, Basil Blackwell (『哲学的考察』奥雅博訳, 大修館書店, 1978)